

音楽を描く児童文学、その諸相

井上 征剛

児童文学と音楽には、ふたつの異なるジャンルというだけでは片づけることのできないつながりがある。私たちが読んでいる児童文学、また演奏したり聴いたりしている音楽は、ともに一九世紀に生じた社会変動の影響を強く受けている。この時期、いわゆる中産階級層の発言力が高まったことを受けて、文化の担い手の中心も王侯貴族から豊かな市民へと変わっていった。その後、児童文学や音楽は豊かな家庭の中で一定の役割を果たすことで、より広い層に浸透していったのである。

一九世紀の音楽観と児童文学

中産階級層が富と権力を手にしたことが音楽にもたらした変化のひとつに、豊かな家庭で子どもに音楽を学ばせて親しい集まりで演奏させ、その家庭で充実した教育が行われていると誇示する、という習慣が現れたことがある（註1）。

このような変化を反映して、一九世紀後半から二〇世紀はじめには、中産階級家庭のたしなみとしての音楽を意識

的に描く作品が目につく。ルイザ・メイ・オールコットの『若草物語』（一八六八〜八六）、ヨハンナ・シュピリ『山の笛（レーザ家のひとり）』（一八九四）、アグネス・ザッパ『愛の一家』（二九〇六）などがそれで、これらの作品からは、子どもと音楽をどのように結びつけるべきか、また音楽をどのように考えるかについて、一定の共通した価値観を見出すことができる。たとえば、音楽の才能に恵まれた子どもには、手厚い保護と公的な制度の枠内での教育が最も重要であり、音楽は娯楽を提供するほかに、人を高める崇高さをも持たなくてはならない。このような考え方は、「高級」な「クラシック」音楽は「娯楽」音楽にはない精神性があり、したがって「低俗」な「娯楽」音楽にはない真の音楽体験をもたらすという、一九世紀にかなり強い二分法によって作られた発想（註2）に沿っている。

こうした意識がほぼ全篇にわたって表出している面白い例が、『山の上の笛』である。主人公ヴィンチは農場の息子だが、小さい頃から音楽に夢中で、農場経営には少しも